大阪府人権擁護委員連合会長賞

「以心伝心」

高槻市立芝谷中学校　三年　圓谷（えんや）　竜司（りゅうじ）

これは僕が体験した出来事だ。僕がバスに乗っていた時、一人のおばあさんが乗車してきた。おばあさんは杖をついていて、肩で息をしているように見えた。バスに乗り遅れると思い、杖をつくくらい悪い足腰なのに急いで来たのだろう。しかし、バスは満員。座っている人々の大半はスマートフォンを見ているなど、おばあさんの存在にも気づいていない。優先席も、おじいさんやおばあさんでいっぱいだった。このバスの中にはおばあさんの座る場所も、その存在に気づく人もいなかった。そのままおばあさんはバスの席についている手すりをつかみにいった。

そのとき、その席に座っていた若い男性は顔を上げ、おばあさんをみた。僕は、「やっと座っている人がおばあさんに気づいた。これでおばあさんが座れる。」と思った。しかし、男性は元々さわっていたスマートフォンに目を落とし、いじりだしたのだ。

僕は今までお年寄りに席を譲るようにしてきた。それが公共の、人としてのマナーだと思ってきたからだ。それに反するような行為を見た僕は怒りを感じていた。でもそれを男性に言いだすことはできなかった。言いだした方が絶対に良いと頭ではわかっていた。しかし、言いだそうと思うほど、もし、それであの人が逆に怒り出したらどうしよう、僕しかこのような考え方の人はいないのではないか、と雑念が湧いてくる。僕は自分の保身に走ってしまった。

そのとき、声がした。

「気づいているのだったら、席を譲った方がいいんじゃないですか。」

若い女性の声がした。僕の近くで立っている人だった。この女性も僕と同じようにおばあさんを気にかけていたのだ。すると男性は、

「なんで俺だけなんでしょうか。他にも座っている人は大勢いる。俺以外にも気づいている人はいるはずでしょう。」

と、大きく強い口調で言った。バス中に響き渡った。座っている人々は気まずそうに下を向き、席を譲る

という人は現れなかった。みかねた運転手が、バスのアナウンスで、
「お年寄りには席を譲りましょう。」
と言い、男性は渋々席を譲った。おばあさんはとても申し訳なさそうだった。
バスがおばあさんの降りるバス停に着いた。おばあさんは女性に、
「私のためにありがとう。とてもうれしかったよ。」
と言い、去っていった。その時のおばあさんの顔は笑っていた。
僕は自分の保身に走ったことがすごく恥ずかしく感じた。そしてあの女性のことを、かっこいい、ああいう大人になりたい、と思った。おばあさんの為に勇気を出して意見を述べたこと、申し訳なさそうにしていたおばあさんを笑顔にしたことに感動したのだ。
あの日、僕は二つのことを学んだ。一つは、僕と同じような意見を持っている人がいるということ。もう一つは、皆良いことだとわかっているのに、声に出すことはなかなかできないということ。そこから僕は、あの女性のように誰かがではなく、自分が声に出さなくてはと思った。そうすることで、僕のように心が動かされて、行動に移してくれる人が出てくるはずだ。そうやって気持ちは人から人へと伝わっていく。あの日は渋々譲った人も、未来では、皆に感化されて積極的に席を譲ってくれると僕は信じる。